

本文では1963年1月18日のじょう乱について解析を行なったが、これと同様の周期の変動が数多く見られるので、さらに他の例についても解析を行ないたい。

この報告は気象大学校在学中に卒業研究として行なったもので、気象大学校力武恒雄教官の絶えざる御指導と激励に深く感謝いたします。また多くの有益な助言をいただいた同校荒川正一博士および本稿の閲読をして下さいました東京航空地方気象台中山章予報官の御厚意に対して厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 気象庁, (1968): 気象庁技術報告第66号北陸豪雪調査報告.
- 2) Matsumoto, S., K. Ninomiya and T. Akiya-

ma, (1967): A Synoptic and Dynamic Study on the Three Dimensional Structure of Mesoscale Disturbances Observed in the Vicinity of a Cold Vortex Center, J. Met. Soc. Japan, **45**, 64-82.

- 3) 力武恒雄, (1968): 北陸の降雪に関する中規模じょう乱の解析, 研究時報, **20**, 339-354.
- 4) 二宮洗三, 秋山孝子, (1965): 1963年1月18日の北陸豪雪のメソ解析, 研究時報, **17**, 641-654.
- 5) Wilkes, M.V., (1949): Oscillation of the Earth's Atmosphere, Cambridge Univ. Press, London and New York, 7-15.
- 6) Matsumoto, S. and K. Ninomiya, (1965): Mesoscale Disturbance Observed in the Vicinity of a Cold Vortex Center, Papers in Meteor. and Geophys., **16**, 9-22.

[書評]

和田英夫: 長期予報新講

(地人書館, 新気象学叢書, 234頁, 800円)

著者和田博士の長期予報に対する哲学は冒頭の小論「長期予報の展望」に明確に打ち出されている。すなわち、時間空間スケールの大きい気象現象を扱うには常に大気大循環の立場から考え、まず平均状態の統計的記述とその維持機構の物理的解釈を行い、次いでそれからの偏差を予測する方法を探究してゆこうとするものである。従って本書の構成も大気大循環とその特性の記述に十分の頁をさき要を得た資料の選択により Climatology としての手際良いまとめを示しつつ極東の循環と日本の季節、気候変動の各章へと進む。かねてより成層圏循環に深い興味と関心を示している著者はまた、同様の見地から突然昇温や26か月周期の問題についても詳しい議論を展開している。一方、長期予報の技術の章では先人の苦勞の跡が生々しく行間に滲み出ているが、そこにおいても相関法、周期法、類似法などの統計的手法から力学予報へ移る過渡期としての相関シノプティックスのような新しいものが提示されている。

このように本書では長期予報に関し常に大気大循環論の目を通して現象を見てゆくとする姿勢がはっきりと伺われる。このことは、過去の長期予報がどちらかと言え

ば単なる形態学に留まっていたのに比して大きな特色であると言えよう。

しかし力学予報としての長期予報というものを更に強く打ち出すには、大気大循環の機構の理解に波動論としてロスビー公式しか出て来ないのはいかにも物足りなく、定性的にせよ傾圧波動の特性に関する記述はぜひ必要に思われるし、あるいは又、数値予報と大気大循環数値実験との融合に際して常に問題となる predictability に関しても、その基本的な考え方と可能性について長期予報の立場からの議論が欲しかった、と言えは無理な注文に過ぎるであろうか。

著者はあとがきの中で本書が専門書とも解説書ともつかぬものになったと謙遜されてはいるが、初めてこの分野に触れる人のみならず現場の予報に携わっている人にも一読して益するところが多いであろう。そしてそれは同時に気象業務としての予報においても基礎的な学問が常に不可欠であることの警鐘ともなっているように私には思われるのである。

[廣田 勇]